

『天台止観成立史の研究』

大窪 康 充

中国天台学の研究において、新たな方法論が見直されている現状にあつて、問題の視点というものが研究方法に重大な位置を占めることは言うまでもない。これまでの研究史を眺めても、天台止観の成立史的な視点にもとづく研究方法は決して少ないわけではない。

昨今、智顗の根本教学を表証する諸著述について、その帰属に関する疑義が投げかけられている。本研究における視点は、このような学界の状況において生じた新たな視点であり、その視点にもとづくことによって、天台止観の成立のより総合的な研究を目指したものである。

著者の大野栄人氏は現在、愛知学院大学の教授の職にあるが、大学院時代は大谷大学の故・安藤俊雄博士及び、横超慧日博士の下で天台学の研鑽を積まれた。このたび氏が、新たな見地に立って、より総合的な研究を指標とし、また中国天台が抱える重要な問題に改めて着手したことは誠に意義深いことである。

二

本書は著者が愛知学院大学に提出された学位論文の公判であつて、七百ページ余りに及ぶ力作である。はじめに本書の全体的な構成について紹介しておこう。

序論

本論

第一章 南岳慧思の禅法とその背景

第二章 天台智顗の禅法と観法の形成

第三章 天台智顗の観心に関する諸著述の成立史的考察

第四章 『摩訶止観』における円頓行体系と四種三昧の成立史的考察

第五章 『摩訶止観』における止観の成立史的考察

附編

第一章 天台文献の考証と三論学派に対する智顗の見解

第二章 一念三千思想の形成過程

一瞥して分かるように、本研究の中心課題は大きく二つに大別される。一つは止観の成立史的な考察、もう一つは智顗の諸文献に関する考証である。いずれも文献学的な方法によって、成立史的な視点にもとづいて考察されたものであり、それは総合的な「止観」法の把握と同時に、文献の帰属に関する疑義の一端を明らかにするものにほかならない。

まず第一章では、智顗の止観体系において思想的・実践的な影響を与えている慧思の教学について論究する。第一節「慧思

の求道と末法観」、第二節「慧思における禅法組織の背景」、第三節「『大品般若経』」「大智度論」所説の禅観と慧思の禅法」という三種の構成をもとに、慧思の生涯、末法観、禅法組織の社会的背景、そして智顗に影響を与えた禅法などについて考証する。慧思においては様々な社会的背景について論じられているが、ことに著者は、『大品般若経』『大智度論』と慧思の禅法との関係性に着眼し、この両経論からの禅観撰取の基本的立場を通して、慧思独自の禅法について指摘する。基本的には両経論の影響がもつとも顕著である『随自意三昧』（一卷）と『諸法無諍三昧』（一卷）を中心に考察が進められており、そこで説示される禅法が多分に両経論の影響を受けていることを文献学的な立場から立証する。慧思による両経論からの禅観撰取について、本来的に般若波羅蜜を重点に置く『般若経』『大智度論』を基調としながらも、実際は禅波羅蜜を根底においた禅観の撰取であることを明示する。そして著者は「慧思はとくに心・心性・如来蔵などの問題に注意をそいで講説する」ことを指摘し、また「その前提には、禅法をたんに観念の問題として捉えるのではなく、あくまで衆生済度としての菩薩行を明らかにするためである」ことを示唆する。さらに著者は禅法と神通との関係性についても言及しており、最後には、このような慧思独自の把握にもとづき、具体的な禅法として四念処観を取り上げ論究を試みている。

続く第二章は、全体が四種の構成より成っており、慧思の影響がいまだ強い智顗の前期時代における禅法および観法、そし

て観法組織の基本構想と基本的立場について究明する。第一節が「中国における方等懺法の実修とその意義」、第二節が「方等三昧行法」所説の禅法」とあって、いずれも方等三昧（方等懺法）を中心に取り扱っている。周知のごとく、方等三昧は『方等陀羅尼経』（四巻）を基調としており、智顗が生涯を通してもつとも重視した三昧行のひとつにはかならない。著者は『方等陀羅尼経』について、一方で現世利益的な信仰を認めながらも、あくまでも罪業にまみれた自己の直視内観の実践的な意味合いに力点をおき、この「経」で教示してくれる懺悔法に特別な意義を見いだしている。いわゆる智顗は、この『方等陀羅尼経』による懺悔の実修法を体系化したわけであり、その結果として『方等三昧行法』『方等懺法』『方等三昧』の三本の撰述を導いたのである。とくに初期の『方等三昧行法』の究明は、円頓止観として体系化された「方等三昧」の原初的形態のあらわれを意味しており、それはまさしく悪の業相に対する懺悔対治を基本とした智顗の人間回復の願いが前提にあると主張する。そして第三節は「次第禅門」所説の禅観・禅法・観法」として、智顗の前期時代の代表的な著作である『次第禅門』（十二巻）を取り扱って、智顗の禅観組織の基本的な構造について考察する。具体的に著者は、禅法などの名目を列挙するという資料的な面からのアプローチによって、インド以来の大小乗諸禅観・諸禅法を観法として体系づけていく智顗の基本的な態度について検討する。いわゆる慧思の学風を受け継ぐことにより、『大品般若経』『大智度論』が智顗の初期禅法の形成に重

大なる影響を及ぼし、またそれが後の止観形成の基盤となったのである。最後の第四節は「智顗における誦經法の形成」とあって、「いかに誦經が単に經典を誦誦することから、天台円教の実踐行法として確立されていくのか」という誦經法の形成過程について、智顗の初期から後期時代の著作をもとに論じている。ここで著者は、智顗の誦經觀の典拠となっている經典とくに指示しながら、それを根拠とした智顗独自の誦經觀について考証している。とくに智顗の誦經觀として四種に大別しまとめて述べられているが、ここでの紹介は省略する。

以上のような、智顗の前期時代における著作を通じた禪觀あるいは禪法組織の解明は、智顗の完成した「止観」法の基本的な構造を示唆するものにほかならない。

続く第三章は、従来の学会における審議未了の文獻に関する研究である。ここでは『観心十二部教經義』『観心食法』『観心誦經法』『禪門要略』という重要な文獻を取り扱って、これらの著作の講説者、講説の年次、講説の意図と目的について究明している。著者はこれら四点の著作に対して、おおよそ智顗の講説であると結論づけており、また推測の域を脱していないものの、それらの年次、さらには講説の意図と目的などについて、綿密な文獻学的な研究方法を通して新たな見解を呈示している。そして第四章は『摩訶止観』の円頓止観と四種三昧の成立について考察する。第二節は「智顗における行体系の変遷」として、『法華經』所説の「方便と真実」義の根幹を究明すると同時に、その義にもとづく円頓止観の体系が確立されていく経過

について論証する。ことに円頓止観の骨格となる二十五方便・十境十乘觀法について、それぞれの変遷過程を智顗の著作を通じて跡づけているが、それらの原型が『次第禪門』の近方便（二十五方便）と遠方便（五種法）であると規定することは従来の学説通りである。第二節は「智顗における円教相即論の形成」である。著者は智顗の相即論の変貌として、『大品般若經』の般若空觀から『法華經』の諸法実相を基盤とした絶待相即の体系確立であり、換言すれば、「不二相即論（否定の論理）から絶待相即（現実の絶待肯定の論理）」への変貌であることを指摘しているが、このような変貌の基盤には、まさしく法華円教の絶待開会の論理を基底とした円融相即（円融三諦・一心三觀）、または互具相即（十界互具・百界千如・一念具三千）といった天台相即論の特質が横たわっている。さらに著者は相即論理を体系づけた意図について、当時の時代的な背景との関連から二点の要因を上げて論証しているが、ここでの紹介は省くことにする。第三節は「智顗における四種三昧の形成過程」として、『摩訶止観』所説の四種三昧の形成過程を明らかにする上で、龍樹の『大智度論』所説の三昧思想、慧思の三昧思想、さらに智顗の前期時代の三昧思想から、『摩訶止観』の四種三昧への展開と、その思想について論究する。ここで著者は、禪觀を主眼とする慧思の三昧において、四種三昧の行法の実践がほぼ備わっていることを指摘し、さらには慧思の実践的・思想的影響が濃厚である『次第禪門』において、四種三昧の原型なり実質が既に成立し備わっており、智顗の初期のころ

において実際にそれを修行していた事実についても明示する。そして第四節『摩訶止観』常坐三昧とその形成」、第五節

『摩訶止観』常行三昧とその形成」、第六節『摩訶止観』半行半坐三昧『方等三昧』とその形成」では、『摩訶止観』所説の常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧（方等三昧）における形成過程について概観されているが、それぞれの三昧が典拠となっている諸経論について緻密な対照表によつて、その典拠と『摩訶止観』の説相を具体的に比較検討することにより、それらの相違点や問題点について究明している。これについて筆者は、著者の注目すべき意見として次の二点を紹介しておきたい。第一点は常坐三昧に対する吟味において、智顗が端坐正観と歴縁対境とを設けたことに深い理由を見いだし、四種三昧のなかで端坐を身儀と規定する常坐三昧と歴縁対境である非行非坐三昧を最も智顗が重視したという見解であり、第二点は方等三昧に対する吟味において、仏道修行（観法）と懺法が不即不離の關係にあることを明示した上で、智顗の実相論の根底を懺悔の中においてみようとする見解である。

最後の第五章は、『摩訶止観』で説かれる十境・十乗観法の一々の形成過程を究明すると同時に、十境・十乗観法の思想的意義について具体的に論究しようとするものである。実際的には、十境が陰入境界、煩惱境、病患境、業相境、魔事境について、また十乗観法が起慈悲心のみに限定され論じられているが、全体が『摩訶止観』本文の忠実な解明と同時に、成立史的な観点から智顗の前期時代の資料との照合を通して研究が進められ

ている。一々の詳細は省き、それぞれの主要な点のみを紹介しておくに留めておきたい。

まず初めに陰入境界について、著者は陰入界の諸見解を智顗の著作全般にわたつて資料を呈示し、陰入界そのものの本質について触れており、またそれが十境の第一に設定される理由について論じている。すなわちそれは、陰入境界は己心の日常性の中に現前するものであることを認識することにより、何よりも陰入界からの己心の脱却を最も重要な課題とする智顗の現実主義的な見方のあらわれである。また陰入界の成立史的な観点からは、『次第禪門』所説の陰入界が『六妙法門』に継承され、さらに『四念処』へと展開し、『天台小止観』において、止・観による六根の対治法へと発展させ、最終的には『摩訶止観』の十境第一陰入境界として体系づけがなされた、という新たな展開を示している。

続く煩惱境では、『次第禪門』『覺意三昧』『六妙法門』『禪門章』などにおける煩惱の生起と対治法との関連について明らかにしながらも、ことに十境中の煩惱境が『次第禪門』の所説に全面的に依拠して説示されていることを明示する。

次は病患境における成立過程とその思想的な意義の究明であるが、著者は病患の発る原因とその対治療法について、決して智顗の独創でないことを指摘し、仏教諸経論を依拠するほかに、陰陽五行説などの中国の伝統的な医学、あるいは道家の説をも取り入れ、総合的な立場から仏教医学を体系づけたと結論づけている。

次は業相境における成立過程とその思想的な究明である。著者は『摩訶止観』の業相境について、『方等三昧行法』と『次第禪門』との深い関係性を指摘する。とくに前者との関係性を重視するが、それはまさしく生涯を通して方等三昧を重視する立場から、自己の業相を明らかにし懺悔滅罪を願う智顗の関心事のあらわれにほかならない。

次は魔事境であるが、はじめに著者は、仏教諸経論を通じて、魔および魔事について吟味する。いわゆる魔とは実在するものではないが、己心中において形成されるものであり、それ故魔の対治法は、あくまで己心中に存在する魔の対治であり、我々の日常生活そのものに対治の眼を向ける以外にないのである。さらに著者は魔事の成立過程について、とくに『大智度論』の所説をベースにして、『治禪病秘要法』『大集経』『維阿含経』『大品般若経』『維摩経』などによって説示されていることを論証する。また民間信仰的、または道教的な鬼魔を取り上げていることも指摘している。

次に十乘観法のなかの、第二起慈悲心（発菩提心）の成立過程とその思想的な究明である。いわゆるそれは、衆生の機感と仏・菩薩の応同といった感應道交に因ることを前提にしながらも、忠実な文献の検討を通して、四種四諦、四弘誓願、そして六即との関連から吟味されている。ことに四弘誓願との関連において、その発菩提心の特徴について言えば、『三大部』講説以前では仏・菩薩の側から説示されているが、『摩訶止観』ではそれが、一念心の上に把握したという見解を表示する。

最後に附編として、天台教学における重要な問題をそれぞれ二節にわたって取り扱っているが、直接的に天台止観の成立の問題と関係がないので、ここでの紹介は省略する。

三

本研究の特徴は、『摩訶止観』説示の「止観」体系の究明にあたり、その成立背景と思想的展開を前期時代の諸著述（『方等三昧行法』『次第禪門』『法華三昧懺儀』『覺意三昧』『法界次第初門』『六妙法門』『天台小止観』『禪門口決』など）に求めることである。このような視点にもとづいた文献資料の照合、さらにそれを通じて得られる「止観」法の思想的（成立史的）な究明は、今後の研究において有益にはたらくことは多言を要しないであろう。

さて、著者が述べているように、このような方法論における研究の背景には、佐藤・平井両博士の問題提議に対する疑義が存在する。著者は「本研究は、佐藤・平井両博士を意識してすすめられたものである」という見解を披瀝しており、「成立史の研究」と題した所以もそこにおいている。しかし全体的な印象として言えることは、本研究が佐藤・平井両博士をはじめとする先学の研究成果を前提とし、それらをあまりにも意識し過ぎたせいか、本来「止観成立史」という一連の視点に立って進められるべき研究が、何か限定されたような究明方法に止まっている感拭いきれない。先学の諸研究に重複しないように努めた著者の意図には全く敬意を表するものの、「止観成立史」

という総合的な一貫性を要する研究において、このような著者の配慮が本当に適切かどうか、疑問が残るところである。

元来、「止観成立史」と題するとき、「天台止観の成立する背景を、仏教諸経論や、智顗以前のインドや中国の諸師の上に究明していくのが妥当」(一〇頁)であるわけだが、著者の関心は「天台智顗がその生涯において、いかなる経過のもとに『摩訶止観』の止観を体系的に組織していったのか」という目的において、いわゆる智顗の最初期から後期にかけての思索の動向に研究の焦点をおく「成立史の研究」にはかならない。著者は文献学的な典拠を諸著述(「三大部」以前)に求めるという独自の的方法論によって、詳細に一つの止観体系における新たな発展過程の展開を提示してみせる。ことに十乗観法の体系化について、その前身を『四念処』に求めている点は非常に興味深い。従来の学説では、『次第禪門』の内方便↓「天台小止観」の五番止観↓「摩訶止観」の十乗観法という発展過程が定説であったが、いわゆる著者の文献学的方法論によってみれば、確かに『次第禪門』では止門と安心法を、『天台小止観』では止門・観門・安心法を説いたにすぎない」(三二八頁)わけである。

しかし文献的(多目的)な関連とは別に、十乗観法と五番止観の内容において、有機的な関連性が認められることも決して否定できない。十乗観法の形成過程において、内方便にその原

初的な形態が認められ、また思想的な基盤では五番止観において十分に見受けられるというものである。この一例からみても、「止観」法の成立史的な視点は、文献学的な考証と同時に、思想的な展開の究明を要するものでなければならぬ。「止観」法の中核である十乗観法が部分的な解明で終わったことは誠に残念ではあるが、今述べたような『次第禪門』内方便から、『天台小止観』五番止観へといった有機的な発展過程の究明こそは、十乗観法の形成過程に関する重要な課題であり、決して避けられるべき問題ではないと考える。

四

今回新たな視点にもとづく方法論において、天台智顗の止観成立史の研究に迫ろうとしたことには重要な意義がある。「三大部」に対する研究方法において、ある意味では行き詰まりを感じさせる時期にあつて、研究する上での様々な可能性と様々な角度の視点をもつことの重要性を改めて示唆してくれたように思えてならない。新しい視点にもとづいて中国天台の重要な問題に取り組み続けてきた著者の努力に敬服すると同時に、残された課題の今後の研究成果に期待したい。

(平成六年七月 B5版 法蔵館 六九五頁 索引三七頁 3
2000円)